



Title	モンゴル人民共和国における自国史・自民族史：グルムグルジマイロ『モンゴル人の歴史』のモンゴル語訳を手掛かりに
Author(s)	中井, 健太
Citation	
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/100498">https://doi.org/10.18910/100498</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# モンゴル人民共和国における自国史・自民族史

## ーグルムグルジマイロ『モンゴル人の歴史』のモンゴル語訳を手掛かりに—

中井健太（外国学・M2）

近代国家にとって自国史・自民族史の記述は、独立国家としての正当性を主張するための重要な政治的行為である。なぜなら、「われわれ」が古代から存在してきたことを、近代歴史学の手法で、つまり「科学的」に論じることができるからだ。本発表は、1924年に社会主義国として成立したモンゴル人民共和国（-1992、現モンゴル国）における自国史・自民族史について、古代をモンゴルの過去として位置付ける試みがどのような文脈で行われたのかという点から明らかにする。その際、ロシアおよびソビエトの学術とモンゴル人知識人との関係に重点を置く。

発表者は、モンゴル最初のナショナル・ヒストリーともいえるアマル『モンゴル略史』（1934）に、ロシア人東洋学者のG.E. グルムグルジマイロの議論が引用されていることに気がついた。グルムグルジマイロは、ロシア帝国末期からソ連初期にかけて中央アジア探検で活躍し、モンゴル人民共和国の政治家兼学者のジャムツアラノと親交があった一方で、「チンギス・ハーン金髪人種であった」という特異な議論を展開したことでも知られる。

近代モンゴルにおける自国史・自民族史の形成や変遷に関する研究はほとんどない。モンゴル人民共和国では、旧ソ連圏の中央アジアや東欧諸国と同じく、原初主義的民族史観を探るソビエト・マルクス主義の影響が強かった。民主化してモンゴル国となった後もナショナリズムの復活と共振する形で、古代からの一貫した「モンゴル」の発展過程をとしてモンゴル史を考える傾向にある。一方、同じ旧社会主义圏のロシア、中東欧、中央アジアについては、近代における民族や民族史の創造に関する構築主義的視点での研究が盛んである。その意味で、本発表はモンゴル近代史学史をスラブ・ユーラシアの近代史の文脈に組み込む試論である。数少ない先行研究の中で、実証的な研究を行ったのは橋誠（2015）である。橋はアマル『モンゴル略史』において「モンゴル」の存在を古代に遡るロジックの情報源について分析し、清代に満洲語訳された漢文文献が利用されていたことを明らかにした。しかし、当時のロシア語文献の利用状況やロシア帝国・ソ連の政治的・学術的影響については課題として残されていた。

グルムグルジマイロは『西部中国旅行記』と『西部モンゴルとオリアンハイ地方』のシリーズで有名である。後者の第2巻（1926）では、彼のモンゴル史記述の特異な傾向が明確に表れている。まずひとつめに、チンギス・ハーンがヨーロッパ系の人種の血を引いているという議論である。漢文史料中に記される丁零 dingling を、古代の内陸アジアに居住していた金髪人種であるとし、チンギス・ハーンのボルジギン一族はその子孫だとする。ふたつめに、モンゴルの存在をモンゴル帝国よりはるか前の古代にまで遡る議論である。具体的には、チベット語で北方遊牧民の総称である hor をモンゴルと読み替え、さらに hor は中国語の胡 hu と同一語とすることで、hor=hu=モンゴルは古代から漢文史料上に記されてきた民族であるとする。

グルムグルジマイロは、1930年ごろまでモンゴル人民共和国で活躍したブリヤート出身の学者兼政治家のジャムツアラノと、相互扶助的な関係を持っていた。グルムグルジマイロは、上述の『西部モンゴルとオリアンハイ地方』の第2巻を1917年内には執筆を終えていたが、ロシア革命と資金不足により出版の目途が立っていなかった。ジャムツアラノは、1926年にモンゴル人民共和国の典籍委員会が印刷・出版の費用を負担してこの書を世に出すことを助けた。翌1927年には、ジャムツアラノがグルムグルジマイロに対して、モンゴル人民共和国の中等学校で使う歴史教科書の執筆を依頼している。グルムグルジマイロは、ジャムツアラノはグルムグルジマイロが書いた『モンゴル人の歴史』と題された原稿をモンゴル語訳の上で印刷・出版することを計画していたが、資金不足や政治状況が計画の完遂を許さなかった。しかし、ジャムツアラノは、グルムグルジマイロの書を世に出すこと多くの資金とエネルギーを注いだと言える。これはなぜだろうか。

発表者は、モンゴル国立図書館に「グルムグルジマイロが書いたモンゴル人の歴史」と題されるマニユスクリプト、つまり『モンゴル人の歴史』のモンゴル語訳が保管されていることを知り、2024年9月に調査を行った。調査の結果、まず、本文7冊と付録5冊のセットが保管されていることが分かった。本文は全てウイグル式モンゴル文字でモンゴル語訳されていた。記述内容は、hor をモンゴルと読み替えてモンゴルの存在を古代にまで遡る議論や、チンギス・ハーンが金髪人種であったとする議論など、『西部モンゴルとオリアンハイ地方』第2巻等でのグルムグルジマイロの特有の議論が

展開されていた。

本文を確認すると、アマル『モンゴル略史』と文言が一致する部分が複数箇所あった。つまり、アマルは、モンゴル語訳された『モンゴル人の歴史』のマニスクリプトからグルムグルジマイロの議論を引用したことになる。では、具体的にはどのような引用だったのか。

『モンゴル人の歴史』のモンゴル語訳原稿の序文 *orušil* には、

紀元前 13 世紀からはじまりモンゴルという名をもった集団 *ulus* は、どの時代から始まって文献史料上に現れたのか、チンギス・ハーンの時代よりさかのぼって 2000 年の時間があり、この時代にアジアの中に多くの国 *ulus*、多くの集団 *ayimay* が興亡してきた中に、モンゴル語で話す部族集団 *obuy ayimay* 確実に存在していたのは間違いないことであるというのが妥当だ。

という一節があるが、全くほぼ同じ一節がアマル『モンゴル略史』にもみられる。また、『モンゴル人の歴史』原稿の第 2 章には、次のような一節もある。

中国の年代記にアバウ・チン（アバンヒ）〔耶律阿保機〕と名付けられた者は、その体はモンゴルである。東アジアの国家政治に特に参入させ、歴史上に歴史上に広く記録され、また彼の名は実際にモンゴルの偉大な指導者である拓跋珪とチンギス・ハーンの 2 人と同じであるという。

北魏の拓跋珪と契丹の耶律阿保機をチンギス・ハーンと並ぶモンゴルの英雄とする記述である。ここにも「モンゴル」の存在をモンゴル帝国よりはるか前に遡るグルムグルジマイロのモンゴル史理解の姿勢が表れている。さて、アマル『モンゴル略史』には次のような一節がある。

契丹国が初めて台頭したことについて、あるヨーロッパの歴史家は言う「耶律阿保機はモンゴルを東アジアの国家政治に特に参入させ、歴史上に広く記録され、また彼の名は実際にモンゴルの偉大な指導者である拓跋珪とチンギス・ハーンの 2 人と同じであるという。」

「あるヨーロッパの歴史家」からの引用が、グルムグルジマイロの『モンゴル人の歴史』のモンゴル語訳原稿であることは明らかである。一方、アマルはグルムグルジマイロの議論を無批判に引用したわけではない。例えば、『モンゴル人の歴史』原稿には、

中国の考えでは、モンゴルはタタールの一派であると書く。その中で、モンゴルの民族区分はタタールと書くことが多い他、（その一方で）タタールの民族区分はモンゴルであると書くことはない。

と書かれているが、アマル『モンゴル略史』では、

タタールはモンゴルの一種であって中国人はモンゴルを時々ダダ〔韃靼〕あるいはダギエイ〔不明〕等と名付けてきたのであって、このようにタタールというのは妥当である。

モンゴルをタタールの下部単位であるか、あるいはその逆として認識するのかの違いだが、ここではアマルがグルムグルジマイロの議論を都合よく再解釈した可能性がある。また、「チンギス・ハーン金髪人種」の議論に関しては、アマルはグルムグルジマイロを酷評する。

チンギスと、チンギスの父のイエスゲイ・バートルはモンゴル人であって、それ以前の祖先はボルテ・チノまで確実に全てモンゴル人であることは自明なことだ。そうであるのに、チンギスの祖先の誰かひとりが高身長で金髪だったというようなことを言って、ヨーロッパの血が入っていたと言っているのは、ほとんど根拠薄弱な言説である。このような混血は元よりチンギスの祖先ではなく、全モンゴル人の中の高身長の全ての人をヨーロッパとの混血人と言うのはほとんど不可能であり、ヨーロッパにも低身長の人はおりアジアにも高身長の人はいる。

このようにアマルは、「モンゴル」の存在を古代に遡る重要な文脈で、グルムグルジマイロの『モンゴル人の歴史』のモンゴル語訳原稿から取捨選択をしつつ引用していることがわかる。またこのことは、ジャムツアラノのモンゴル史教科書出版計画が、完遂こそしなかったものの、モンゴル語訳は確実に進められ、さらに現在に至るまで重要なモンゴル通史であるアマル『モンゴル略史』に重要なソースをもたらすことになった。

ジャムツアラノがグルムグルジマイロの書を世に出すことに多くの資金とエネルギーを費やした理由は、モンゴルの存在をモンゴル帝国以前に遡る歴史記述が、新生の独立国家としてのモンゴル人民共和国の正当性を「科学的に」主張するための有効な手段となると判断したからである可能性が高い。なぜなら、両者の手紙のやり取りにおいて、ジャムツアラノが、『モンゴル人の歴史』執筆に際しては時間的・空間的にできるだけ「モンゴル史」の枠組みを広くとって書くよう注文をつけたり、グルムグルジマイロの書が歴史に关心を持つモンゴルの若者を勇気づけるなどと書いているからである。

旧ソ連圏での国家史記述においては、ソビエト・マルクス主義流の原初主義的民族史記述が試みられたことが先行研究で指摘されているが、これはモンゴル人民共和国史においても同様であった。一方で、初期にはソビエト・マルクス主義とは異なる文脈からの引用が原初主義的民族史を強化したことも注意しなければならない。本発表はその一例である。

## 参考文献

- 橋誠(2015)。「モンゴルの国史編纂と翻訳文献」『下関市立大学論集』59-1, 93-103..